〈諸事項の報告・紹介〉

愛知大学東亜同文書院大学記念センターの展示室について

東亜同文書院大学記念センター　ポストドクター　武井義和

はじめに

愛知大学には学内展示施設として「愛知大学記念館」がある。この建物はもともと1908（明治41）年に陸軍第15師団司令部として建造され、第二次大戦中は陸軍予備士官学校本部、そして戦後の1946年に愛知大学が誕生して以降、1995年まで大学本館として使用されてきたものである。1990年代前半に学内で保存か取り壊しかで議論がなされたが、保存が決定し、また1998（平成10）年に文化庁により有形文化財に登録されたこともあり、「愛知大学記念館」として生まれ変わったのである[1]。

愛知大学記念館

愛知大学記念館内部

現在、ここには主として愛知大学の前身で中国・上海に存在した東亜同文書院（1901～1945年。1939年大学に昇格）と、その同文書院で教員を勤めた後に中国の革命家・孫文の協力者となった山田良政・純三郎兄弟（良政：1868～1900年、純三郎：1876～1960年）に関する資料を展示した「東亜同文書院大学記念センター展示室」、山田純三郎遺族をはじめ同文書院卒業生やそのご遺族から寄贈された図書雑誌類を配架する「書院図書資料室」とともに、1946年に愛知大学が誕生してから現在までの大学の歴史をパネルや資料で紹介する「愛知大学史展示室」や、東亜同文書院大学最後の学長で愛知大学創設に尽力し、後に第2代・第4代学長を務めた本間喜一を記念する「本間喜一展示室」などがある。

これらは「愛知大学東亜同文書院大学記念センター」（以下、「記念センター」と略す場合あり）の管轄であり、もともとは「東亜同文書院大学記念センター展示室」（図書室も含む）と「大学史展示室」の構成で1998年5月9日に開設されたが、文部科学省より2006年度から5年間のオープン・リサーチ・センター事業に選定されたのを契機として、事業の一環として記念センター管轄下の各展示室の整備などが2006年度から2007年度にかけて行われ、またナレーションシステムも導入して

展示室の充実が図られた。

2010年5月、全国大学史資料協議会東日本部会が愛知大学で開催されることになったため、本稿はそれを記念して記念センターが所蔵する資料の簡単な紹介と2006年度以降の展示室整備、そして現状について記すことにする。なお、それに際して以下に注意点を挙げる。本稿は博物館学などのような専門的な研究を踏まえて理論的に論じるものではないため、事務組織の体制や研究体制、具体的な資料保管状況などについては扱わない。また、愛知大学記念館にはガラ紡機械や博物館実習を履修する学生たちの展示室「愛大ミュージアム」もあるが、それらは記念センターとは別組織が担当しているので、本論では言及しない。

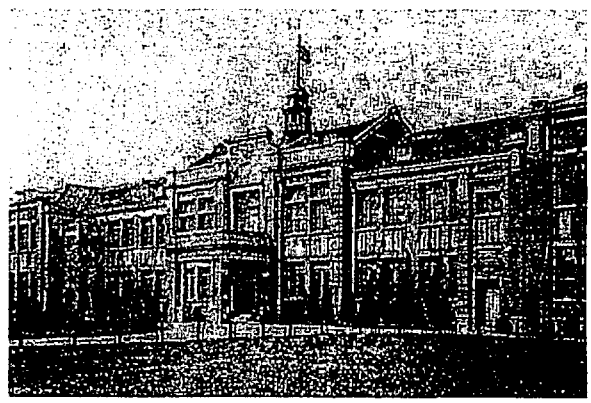
1．東亜同文書院、山田兄弟とその関係資料

最初に、記念センターの展示のみならず、所蔵する資料の中心を占める東亜同文書院と山田兄弟について概略を記すとともに、それぞれに関する資料を大まかに紹介しておきたい。

①東亜同文書院と関係資料

愛知大学の前身的存在である東亜同文書院は東亜同文会が運営していた学校である。当初は1900年に南京で開設され、名称も「南京同文書院」であった。南京同文書院は日清提携を教育の側面から実現していくことを目的とする近衛篤麿東亜同文会会長（文麿の父、貴族院議長）の構想をもとに、清朝高官であった劉坤一両江総督の理解と協力なども得て誕生した[(2)]。

しかし、程なく発生した義和団事件の影響で南京が政情不安定になったため上海へ移転し、翌年東亜同文書院として再出発することとなった。その後、1921年には外務省管轄の専門学校、さらに1939年には大学に昇格し1945年の日本敗戦による閉学まで存続したが、日中友好を目指す精神や、中国を研究し理解する姿勢は東亜同文書院で後々まで受け継がれた。この学校に入学した学生の中心は、各府県が選抜し学費を負担する府県費生だった。彼らは書院で中国語を徹底して学び、また商習慣をはじめとする中国のさまざまな事情も学んだが、そうした学業の集大成として「調査大旅行」を行った。これは1907年から1943年までの長期にわたり継続したもので、卒業年次生が小グループに分かれて毎年夏を中心とする数ヵ月の時間をかけて、事前に設定したテーマに沿って中国各地を調査して歩いたものである。そのコースは総計700ほどに及び、これほど大規模かつ長期的に中国を調査した組織は他にないといわれる。学生たちの調査の成果は『調査報告書』としてまとめられ、卒業論文に認定された。また大旅行中の日記は『大旅行誌』と称され、ほぼ毎年刊行されていた。これらは戦前の中国を知る貴重な資料である。



東亜同文書院本館

敗戦で閉校になるまでに5,000名ほどの卒業生を輩出したが、以上のような教育を受けた彼らは、その多くが中国で職に就き、または中国と関わりのある仕事に就いていった。特に目立ったのが商社に入り貿易などの形で中国との経済活動に携わったビジネスマンや、外交官、新聞記者などであった[(3)]。

現在、記念センターでは南京同文書院および東亜同文書院初代・第3代院長を務めた根津一（在任1901～1902年、1903年～1923年）に関する資料、いわゆる「根津家資料」をはじめ、卒業アルバム

や写真を中心とする各種資料、同窓会組織として存在していた滬友会が所有していた資料や、図書類（書院に関するものや書院卒業生が記した回想記の類が多い）を所有しているが、これらは東亜同文書院卒業生やそのご遺族、滬友会などから寄贈されたものであり、展示室で公開しているもの以外は大体資料庫で管理している。また図書類は書院図書資料室で配架している[4]。

②山田良政・純三郎兄弟と関係資料

山田良政・純三郎兄弟はともに①で述べた南京同文書院、東亜同文書院の教員を経て、孫文の革命を支援した人々である。彼らは弘前藩士であった山田浩蔵を父として、幕末維新期に現在の青森県弘前市に誕生した。

山田良政

良政は1890年に北海道昆布会社に就職し同年には上海支店に勤務、そのかたわら尾張出身の荒尾精が上海に設立した日清貿易研究所（1890～1893年）に通い、中国語などを学んだ。日清戦争では通訳官として出征、1898年の「戊戌政変」では改革派の王照という人物の救出に関与している。その彼が孫文と出会ったのは1899年、東京の良政の仮寓においてであった。これ以降、良政は孫文の協力者となっていく。1900年に南京同文書院が誕生すると教授として赴任したが、同年孫文が広東省恵州で清朝打倒のための戦い、いわゆる「恵州起義」を起こすとそれに参戦する。しかしこの戦いは成功せず、結局良政は清朝軍に捕らえられ処刑されてしまう。享年33歳であった。

一方、純三郎も南京同文書院に学生として入学していたが、学校が上海に移転し東亜同文書院として再出発すると、事務員兼助教授として勤務した。日露戦争に出征後、1907年復職し教授となるが、間もなく辞職し誕生したばかりの南満州鉄道株式会社に就職、1909年上海に派遣され三井物産上海支店に満鉄駐在事務所を設置した。この時期以降、兄良政の遺志を受け継ぐかのように、純三郎は孫文の側近となり、秘書役を務めるようになっていく。その過程で多くの中国の革命家と交友を持ち、また信頼されていった。1925年に孫文が亡くなった時には、死に水を取った唯一の日本人といわれている[5]。

孫文（右）と山田純三郎

その後、日中戦争中は上海で日本語専門学校を経営するなどしていたが、日本敗戦直後も中国国民政府は彼を孫文の協力者として厚遇し、従来通りの生活を保障した。1948年に帰国し、1960年に東京で亡くなった[6]。

純三郎の死後、厖大な資料を管理していた四男の順造氏は兄弟を顕彰すべく、個人で資料館を建てる計画を有していた。しかし個人での建設は資金面など多くの困難があり、最終的に断念された。やがて病気になり、亡くなる直前の1991年に愛知

大学へ資料を寄贈する意思を表明され、逝去後の同年10月寄贈されたのである[7]。

記念センターでは山田兄弟に関する資料を「山田家資料」と称しており、大別すると①書画類、②書簡類、③写真類、④図書類、⑤資料ファイル類、⑥カセットテープ類、の6種類からなる。このうち山田兄弟が生きていた時代の、または直接彼らに関わる資料は①～③が該当するが、良政は若くして亡くなったため、純三郎に関するものが殆どである。この中で②に含まれる、純三郎に関する資料約600点はすでに整理が終了しており、作製されたマイクロフィルムは愛知大学図書館で管理されている。また、③写真類は厖大な量に及ぶが、順造氏に関する戦後の写真も非常に多い。一方、④～⑥は順造氏が兄弟について研究・調査した資料であり、歴史に関する書籍、研究のために用いられた図書・論文・資料のコピー、それらをルーズリーフに筆写したもの、聞き取りをしたカセットテープなどである[8]。

2．記念センター展示室の整備

①施設改修以前の状況

1998年5月9日の展示室開設から2006年度と2007年度に施設改修が行われるまでの間、当時の展示室を見学順に述べると東亜同文書院大学記念センター第1展示室（図書室）、第2・第3展示室（孫文、山田兄弟関係）、第4展示室（東亜同文書院関係）、そして大学史展示室2部屋（旧軍時代から1950年代までと、1960年代以降の展示）の構成であった。

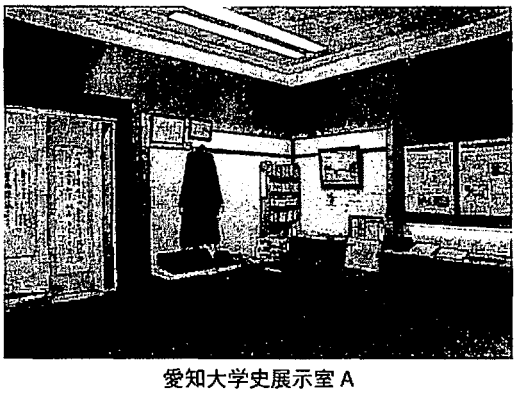
第1展示室は寄贈された図書のうち、東亜同文書院、山田兄弟、近代日中関係史、日本や中国の近現代史に関する図書雑誌を配架した図書室であり、第2・第3展示室は山田良政・純三郎兄弟の生涯を軸として、孫文との関わりや中国近現代史を紹介する構成となっていた。展示室開設以前にしばしば行われていた展示会で使用されていた100点近くの資料があったため、開設準備段階ではそれらをもとに展示する資料が決定された。また、山田兄弟の生涯を軸とする関係上、見学者が理解しやすいように展示全体を時期区分して「山田浩蔵と良政・純三郎兄弟」、「孫文（中山）と宋慶齢」、「辛亥革命前後」、「広東政府期」、「孫文逝去前後」、「国民政府期」、「純三郎と新中国・愛知大学」、「山田純三郎一家」、「山田純三郎関係の刊行物」といったコーナーに分け、あわせてコーナーを示すボードを作製し、展示室の上部に吊るして示すこととした。一方、書簡類などはガラスケースに入れ、掛け軸状の書幅は壁面で吊るし、写真は殆どの場合パネル化し壁面を利用して展示する方法を採った。

一方、第4展示室設置に当たっては東亜同文書院の特徴を示す事項を挙げて、年表、「近衛家4代の書」、「書院の指導者たち」、「東亜同文書院（大学）の仮校舎」、「書院生活」、「大旅行と『調査報告書』」、「東亜同文書院（大学）学籍簿・成績簿など」、「東亜同文書院（大学）関係の刊行物」といったコーナーに分けて展示を構成した。しかし、開設当初は東亜同文書院に関する資料が不足していたため、「根津家資料」やすでに記念センターにあった関係資料のほか、愛知大学図書館に所蔵されている大旅行の『調査報告書』を5冊ほど借り出してガラスケースに展示し、また記念センターが発行したブックレット『東亜同文書院大学と愛知大学』1～4（六甲出版、1993～1996年）などに収録されている写真を取り込んで大きなパネルを作製し、壁面を利用して展示するという方法を採った。その後、書院卒業生やそのご遺族から資料が寄贈されるようになり、展示資料も次第に充実するようになった。

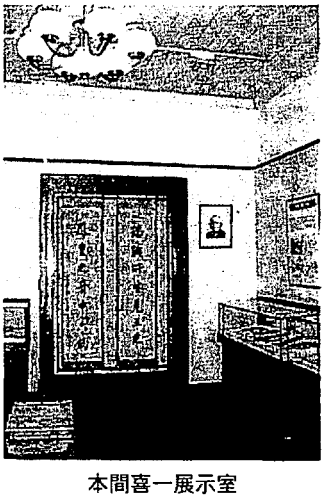
これらの展示室は玄関から入って左手に固まっており、また第1展示室は一番奥に位置し、そこから手前に戻ってくる見学順路だったため、見学者にとっては少し不便であったと思われる。

② 2006年度～2007年度の改修

しかし、2006年度から2007年度にかけて行われた施設改修により、以下のように変わった。1つ目は、大学史展示室が記念センター展示室から見て玄関をはさんだ反対側の部屋に移転し、2部屋から3部屋に増加したことである。あわせて、名称も「愛知大学史展示室」と改められた。これにより、新たに展示ケースが整備され、従来の展示物を移設したほか、「愛知大学の創成」、「愛知大学を揺るがした事件・事故・紛争」、「国際交流の発展と大学の社会的拡がり」、「近年の愛知大学」という4つのコーナーに分けて展示室のリニューアルが図られた。特に、豊橋校舎にあった学生寮の一室を再現したジオラマが新たに造られたことは特筆すべきことである。こうして2007年4月19日に「愛知大学史展示室」がリニューアルオープンしたのである。また、「本間喜一展示室」は2007年10月に完成した[9]。



愛知大学史展示室A

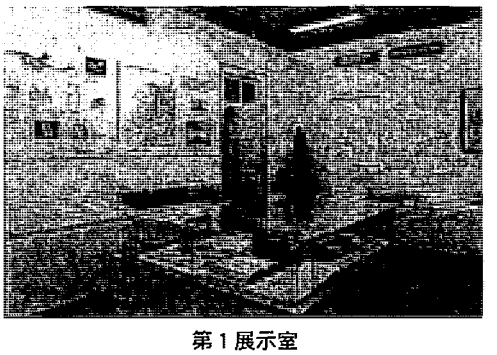


本間喜一展示室

2つ目は、同じく2007年度に記念センター展示室の見学順路を逆にし、それまでの第4展示室を第1展示室として見学しやすいようにしたことである。それに伴い、展示物やパネルの展示室内移転を行った。

3つ目は、それまで展示室として組み入れられていた図書室を分離し、「書院図書資料室」および「資料閲覧室」を誕生させたことである。また、書院研究室や講義室も設けられ、研究や講演会が行えるような環境も備わるようになった[10]。

以上のような整備の結果、展示室のみを見学順に記すと記念センター第1展示室（東亜同文書院関係）、第2・第3展示室（孫文、山田兄弟関係）、愛知大学史展示室A（創成期から1960年代）、愛知大学史展示室B（1960年代から現在）、本間喜一展示室の6室構成に生まれ変わった。東亜同文書院関係展示室と孫文、山田兄弟関係展示室における展示構成、つまり展示室をコーナー区分して展示を見せる方法については変更なく、従来通りであるが、愛知大学史展示室においてはそれまで紹介していた、現在の大学キャンパス前史としての旧軍に関する展示が外された[11]。



第1展示室

第3展示室

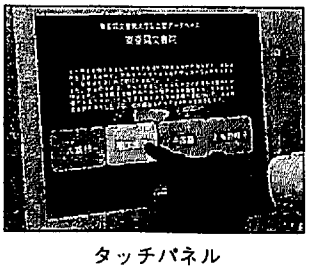
③ナレーションシステムの導入

また見学者の目線に立って、展示をより理解して頂くために2007年度末から2008年度初めにかけてナレーションシステムを整備し、東亜同文書院から現在の愛知大学までの100余年の歴史をまとめたDVD「東亜同文書院から愛知大学の歩み－21世紀にはばたく真の国際人の育成」、音声ガイダンス、タッチパネルの3種類を導入した。

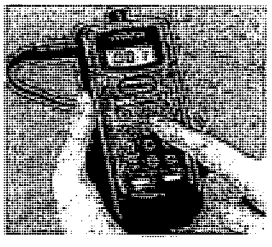
DVDは授業の一環で記念センターに見学に来る新入生に対し、愛知大学の歴史を知ってもらうために講義室で上映して使用するほか、外部での講演会などにも使用することを目的として作製されたものであり、現在新入生の入学式やオリエンテーションなどで配布もされている。

音声ガイダンスは40台常備し、使用料は無料である。32項目の展示に関するの解説が入録されており、それぞれの解説の長さは1分程度である。日本語はもちろん、英語や中国語も入力されており、中国や台湾などの中国語圏、加えて近年目立ってきている欧米からの見学者にも利用されている。

タッチパネルは、展示室やDVDで公開・紹介できなかった貴重な資料をデータに取り込み、指で画面を押していくだけで資料とその簡単な解説を目にすることができるシステムである。記念センター展示室に2台、愛知大学史展示室に1台、愛知大学記念館2階の旧学長室前に1台、資料閲覧室に1台の合計5台が設置され、さまざまな資料を画面上で観ることができる[12]。



タッチパネル



音声ガイド

3．記念センター展示室の現状と今後の課題

統計によると、1998年の展示室開設から現在までに約1万4,000名の来館者があり、1,000名を越えたのが2005年、オープン・リサーチ・センター事業が開始された2006年には1,698名、2007年には1,732名、2008年には2,625名を数えている。東亜同文書院について関心を持った研究者や愛大の学生と卒業生、書院や孫文に関心を持つ日本人研究者はもちろん、中国や台湾、さらに欧米からの研究者、建物や旧軍施設に関心がある方、近隣の中学生などさまざまであるが、国内外の研究者をはじめ一般の方々まで幅広い来訪者となっている。

これはすでに述べた展示室のリニューアルをはじめ、さまざまなPR活動の成果、そして2008年度より開始した土曜日の開館などが影響したものと思われる[13]。いずれにせよ、東亜同文書院大学記念センターの存在が周知されてきたことの現われといえよう。

では、見学者はどういうところに興味・関心を持ち、どのような感想を抱いているのであろうか。この点について、一例として2008年6月21日（土）に愛知大学豊橋校舎で日本展示学会と愛大講演会が開催された際に、見学に訪れた方に依頼したアンケートを挙げてみたい。当日は30～40名が愛知大学記念館を見学に訪れ、アンケートを依頼した結果16名の協力を得た。問いと回答は以下の通りである。

1．最も印象に残った展示コーナーはどこですか？（複数回答可）

回答が多い順に、

①旧学長室	5
②第1展示室	3
第2・第3展示室	3
ガラ紡	3
③愛知大学史展示室A	1
本間喜一展示室	1

愛大ミュージアム　1

④無回答　5

2．最も印象に残った展示物は何ですか？（複数回答可）

①孫文の筆跡とその呼び方、旅行地域。

②東亜同文書院の学籍簿。

③愛大前の風景を描いた油絵（注：在愛知大学史展示室A）。

④山岳部の遺品。

⑤写真資料。

⑥実物資料があるのがすばらしい。

⑦昔の書画がたくさん残されていること。

⑧ミュージアムボックス。

⑨ガラ紡（2名が回答）

⑩特にない。

⑪よくわからない。

⑫無回答（6名が無回答）。

3．展示資料は見やすかったですか？（○を付けて下さい）

見やすい　8

普通　7

見にくい　0

無回答　1

4．その他、展示方法や設備など、何でも結構ですのでご意見・ご感想などがございましたらお書き下さい（複数回答可）。

①学生の大旅行についてキーワードの抽出展示と現代を比較したコメント、孫文の日本評。

②映像関係。

③建物自体の歴史・由来などの紹介。

④古い施設を活かしていて、良い印象を持ちました。

⑤このまま残していって頂きたい。

⑥愛大の長い歴史を感じました。現役の学生たちが興味を持って訪ずれ(ママ)てくれると良いと思うのですが(学生の保護者の方)。

以上がアンケートの結果である。もちろんこれは見学者全体の意見の反映ではないため、飽くまで参考として捉えるべきであるが、幾つかの特徴が浮かび上がっている。1．の質問については、記念センター展示室である第1～第3展示室が印象に残った旨の回答が比較的多く寄せられているが、一方でガラ紡展示室、愛大ミュージアムも回答があり、興味・関心が愛知大学記念館の展示全般にわたっている様子がうかがえる。また、旧学長室も多く挙げられているが、愛知大学記念館という建物の歴史への関心に繋がる回答ではないかと思われる。

2．では、①と②が記念センター第1～第3展示室、③と④が愛知大学史展示室Aに関する回答だが、⑤～⑦は記念センター展示室全体の資料展示の印象について回答したものである。特に⑤「写真資料」は、記念センター第2・第3展示室で展示しているパネル化された写真のことと思われる。一方、無回答は時間がなくて記さなかったか、初めて知ることばかりで回答に戸惑ったものかと思われる。

3．は展示方法について寄せられた回答であり、資料の展示と資料を紹介するキャプションなどについて評価を得たものと解釈している。

4．の②「映像関係」という回答は、ある見学者のご要望に応じて講義室で上映したDVD「東亜同文書院から愛知大学の歩み」、もしくはタッチパネルを指していると思われるが、ナレーションシステムが見学者の注目を引いたことがうかがえる。

以上のように、記念センター展示室やそこで展示されている資料が印象に残ると同時に、それにとどまらず、他の展示空間やさらに建物全体への興味・関心を持たれた様子が浮かび上がる。

しかし、一方で課題も浮き彫りとなった。例えば2．④「山岳部の遺品」という回答であるが、それは1963年1月に山岳部員13名が富山県薬師岳で遭難した「薬師岳遭難事故」に関する展示品を

指す。しかし、実際には山岳部の装備をイメージ再現したものであるため、今後の展示方法の在り方として注意する必要性を感じた[14]。

以上のアンケートは見学者の反応を知る上で、有効な資料になり得ると考えている。

おわりに

以上、粗雑ながら記念センターの現状について、1998年の常設展示室設置から近年の施設改修の状況も踏まえつつ記してきた。

個人的なことで恐縮であるが、筆者は1995年夏、愛知大学大学院修士課程１年生の時に縁あって山田家資料の整理に加わるようになった。そして1997年秋に展示室設置のプロジェクトが始動した際には、メンバーの１人として末席に加わった。1998年５月以降、資料整理を担当するかたわら見学者の応対、特に説明を希望する方には展示説明を行うという業務を行ってきた。したがって、記念センターがオープン・リサーチ・センター事業に選定されて以降、東亜同文書院に関する研究を本格的に行うようになったが、従来の業務の在り方についても常に意識してきた。

すでに触れたように、近年見学者は増加しており、また2003年頃から毎年４月～７月の間、入学生を対象とした入門ゼミ、学習法、短大部の基礎演習という時間を活用して、教員が学生20名ほど（多いときには30名近く）を引率するという形で見学に訪れる学生も増えてきた。こうした学内外の見学者に展示室を通じて愛知大学の歴史を知ってもらうとともに、現在の愛知大学についても理解してもらう場として、益々重要な役割を担ってきていると考えている。また、東亜同文書院と山田良政･純三郎兄弟は同校の教員という形で互いに関係があるとともに、ともに中国に在ったことを鑑みれば、見学者が日中関係史について学び、そして今後の日中関係について考える切っ掛けを提供する場として、その役割を果たしていかなければならないとも考えている。

今後、展示の方法や構成などについて他大学の博物館学芸員の方々と交流を行い、さらなる展示室の運営と活用に活かしていくことが必要と思っている次第である。

今回は見学に訪れる愛知大学学生の反応などについては取り上げなかったが、「展示と教育」という観点から、稿を改めて論じていくことを予定している。

注：愛知大学史展示室Ａ・Ｂと本間喜一展示室は、記念センター内の愛知大学史事務室（佃隆一郎氏）が主に管理しているが、今回の拙稿執筆に際して筆者がこれらの展示室に関する記述も担当したことを、ここに記しておく。

注：

(1) 拙稿「資料紹介　有形文化財登録証」(『研究報』4、2008年12月)。

(2)『東亜同文書院大学史』76～78頁（滬友会、1982年)。

(3) 東亜同文書院については前掲『東亜同文書院大学史』、藤田佳久『東亜同文書院生が記録した近代中国』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター編、あるむ発行、2007年）などを参照。

(4)「根津家資料」をはじめ、東亜同文書院卒業生やご遺族などから寄贈された資料については(それ以外の方からの寄贈も含む)、拙稿「愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵資料目録」(『同文書院記念報』VOL.14、愛知大学東亜同文書院大学記念センター編集発行、2006年)、同「記念センター所蔵根津家資料目録（付、寄贈資料目録①)」(『同文書院記念報』VOL.15、2007年)、同「記念センター所蔵寄贈資料目録②」(『同文書院記念報』VOL.16、2008年)、同「記念センター所蔵寄贈資料目録③」(『同文書院記念報』VOL.17、2009年）などを参照。ただし、寄贈図書類は別に登録されるため、以上の目録には含まれていない。

(5) 結束博治『醇なる日本人　孫文革命と山田良政・純三郎』213～214、221頁（プレジデント社、1992年)。

(6) 山田良政・純三郎兄弟の生涯については前掲『醇なる日本人　孫文革命と山田良政・純三郎』、保阪正康『孫文の辛亥革命を助けた日本人』(筑摩書房、2009年）に依拠した。

(7) 今泉潤太郎・藤田佳久「孫文、山田良政・純三郎関係資料について」413、416頁（『愛知大学国際問題研究所紀要』97、1992年)、阿部弘・大野一石・村上武「座談会　孫文・辛亥革命と山田兄弟関係資料受け入れ経緯」(『同文書院記念報』VOL. 3、1996年)。

(8) 前掲「孫文、山田良政・純三郎関係資料について」417～420頁、拙稿「愛知大学が所蔵する山田兄弟と孫文関係史資料について」147～148頁（『オープン・リサーチ・センター年報』3、愛知大学東亜同文書院大学記念センター発行、2009年)。

(9)『オープン・リサーチ・センター年報』創刊号、145頁（2007年)、越知專「愛知大学東亜同文書院大学記念センター大学史展示室リフレッシュオープン」(『研究報』2、2007年11月)、拙稿「リニューアルした記念センター」(『研究報』3、2008年3月)、佃隆一郎「大学史展示室A・Bの設営と概要」375頁（『オープン・リサーチ・センター年報』2)。

(10) 前掲「リニューアルした記念センター」。

(11) 愛知大学の施設の前身という観点から旧軍時代の施設について取り上げているものとして、『愛知大学小史　六十年の歩み』30～31、49～50頁（愛知大学小史編集会議編、梓出版社、2006年)、佃隆一郎「豊橋にあった、陸軍教導学校と予備士官学校—愛知大学の「施設面での“前身”」として—」(『愛知大学史研究』3、愛知大学東亜同文書院大学記念センター発行、2009年)などが挙げられる。

(12) 山口恵里子「大学記念館にDVD・音声ガイダンス・タッチパネルのナレーションシステムを導入」(前掲『研究報』3)、同「DVDを愛知大学関係者へ配布」(『研究報』4、2008年12月)、同「大学記念館にDVD・音声ガイダンス・タッチパネルのナレーションシステムを導入」367～372頁（前掲『オープン・リサーチ・センター年報』2）などを参照。

(13) 記念センター事務室「大学記念館の来館者について」(『研究報』6、2009年12月)。

(14) アンケートの集計結果と分析については、拙稿「記念センター見学者の感想は」(前掲『研究報』4）による。